

<2004>

- 大量生産と大量消費のゆくえ(NPO 法人・環境文明21会報)
- 志士の会 35周年記念誌

大量生産と大量消費のゆくえ

ながれ

中井 俊作 (なかいしゅんさく/熊本県天草在住) 天草市五和町手野 1の2646
〒863-2424, 〒: 0969-34-0054

環境に負荷をかける一方の大量生産・大量消費がいつまでも続くわけがありません。それは茹でガエルの例え話のように緩慢なる自・他殺行為に等しいことで、人間の世界にあつては無知と無責任の総和、皆で赤信号を渡っているから止められないだけの話です。何故こんな情けない、恥ずかしいことが続くのか。いつまで続くか。止める手立てはあるのか。

何故続くのか

世の中の実態を見据えていないからです。

「20世紀の近代化、工業化の実態は膨大な石油消費の上に湧く産業バブルであった」

この認識から想を起さないと糸口が見えてきません。二つの世界大戦で植民地搾取を土台とした不条理は表向き影を潜めたものの、戦争はいわばバブルの泡同士の潰し合いで終わってしまい、体質そのものは改めることもなく、主には三つの禍根と一つの後遺症を残したまま、戦後復興の歩みを進めました。

多大な犠牲を払いながら、それを教訓として活かしきれなかったわけです。

三つの禍根、その一つは貨幣経済における金利と投機。お金が時の経過につれて自動的にお金を生む金利、そして金融・不動産を筆頭とする相場で差益を稼ぐ投機、この観念と行為を認めてしまったこと。バブルの拡大再生に拍車をかけ、金融の暴力化=富による支配を許してしまいました(安住の地を持ってない金融界の人々の、必死の自衛策だったのでしょうか)。

次の一つは核兵器という最終兵器の登場を見ながら、東西二大陣営の対立が双方に軍(職業軍人と軍備)と軍需産業を残させてしまったこと。煽

り立てられる不安と過剰反応は再び軍拡競争の泥沼へ。たとえ冷戦終結といえど、地上に軍と軍需産業、そして兵器ある限り、人々の社会心理に疑心暗鬼と不安の種が播かれます。国際的な信義を立てられず国連も立ち往生という次第です。

残る一つは節度なき都市中心社会(抑制を知らずガン化を進める都市)。急速な産業バブル化は、労働力の都市集中を招き、巨大化する“胃袋”は新たな仕事を生んで更に人を呼び、自己増殖を始めます。その胃袋を満たすために農畜水産業(林業については前号で特集されました)の生産力は上がったかに見えますが、これは規模拡大・機械化、多頭羽飼育に密養殖という具合に産業バブルの一角化した故のこと。石油が断たればたちまち萎んで、頼りになるのは本来の生態系の生産力となるはずです。ところがこちらは肥大化する都市の生活需要を満たすため、あるいはバブル製品の捌口として、山には道路、川にはダム、干潟は埋め立て、岸辺は護岸、農地は宅地化…。コンクリートで固められて物質循環・生態系は寸断されてその生産力は低下する一方です。

気の毒では済まぬのが都市に生まれ育つ子どもたち。人が生きるにあたって、本来義務教育の骨格となって然るべき食育・農林畜水産体験は総合学習の一コマ程度で済まされて、後はひたすら受験に追い立てられ、二人に一人は大学卒という時代に至ってもCO₂排出量は増えるばかりです。

交通運輸通信網の発達で、いまや都市生活様式は農山漁村にまでまん延、津々浦々に自販機が並び、コンビニが建つ。子供に高等教育受けさせるのは親の務めと、妻は(消費者ニーズに振り回されつつ)野良で汗にまみれ、夫は公共土木事業に精を出す。その子どもたちは農村にいて農事を見習うユトリなく、卒業すれば行き先は…。

人・産物を吸い上げてやまぬ都市。代わりに持ち込まれるのは量販店に大量商品、セメント袋にブルトナー、廃棄物に発電所…。

人も来る：グリーン・ブルーツーリズム、医療費のかかる人、高額商品の訪問販売員…。

電話もかかる：ハイリターン投資や化粧品勧誘、受験相談、お手軽ファイナンス、ケイタイにはワン切り…。

チラシの常連はバーゲン、パチンコ、ダイエット、テレビをつければ怒涛のごときコマーシャル…。いずれも都市が生み出し、吐き出し引き込もうとするものばかりです。

今日では先進工業（産業バブル）国といわれる国はいつでも国全体が都市化してしまった様なもので、都市・農山漁村の区別なく人々は、産業バブルの果実（文明の利器）の筆頭・クルマを乗り回し、あるいは家電製品によって革命的に家事から解放された女性たちがその分社会進出し、新たな“泡”をかき立てています。

収入を上げ購買力を増す巨大マーケット目がけて繰り広げられる熾烈なサービス競争（リストラされた人々も戦列に加わり、ますます“泡”を吹き上げます）、そして“便利で快適”とはうらはらに裏で支える現場の疲弊（トラック運転手など、24時間物流を担う人々の過酷な労働実態）は目を覆うばかりです。

モノやサービスに回らなかったお金は貯蓄に、老後に備えての年金に、万一の場合の保険に…。集まったお金は株式・証券市場を通して再び産業バブルの源泉に、あるいは国債などによって財政投融资の原資となり公共土木事業へ投下されて産業バブルの基盤整備に。相場の動き次第では投機に回り…。

もう書き連ねるまでもありますまい。人、皆それぞれ身をおいた職場で、少しでも現金収入を得ようと精を出していることに違いはないのです。恐るべきはその実態が産業バブルの渦中にあると

いうこと。人々の何気ない日常の振る舞い、例えば安くて旨いものを求める口が（食料の過半を輸入する我が国にあっては国内以上に海外で）現場で汗する人や生態系に対して、厳しい状況を生み出しているに違いないということです。そのことに思いを及ぼす以前に、暮らしに追われてあるいは既得権の上に安住し、人と商品と情報の洪水に溺れてしまっていることです。（三つ目の禍根はあまりにも日常的なことなので表しにくく、長くなりました。）

一つの後遺症とは（大戦後、戦勝国の思惑で勝手に国境線が引かれたことによって生じた）民族対立のことで、三つの禍根とも絡んで世界を一層不安定なものにしつつある今日です。

いつまで続くか

三位一体化した禍根と後遺症の根深さを考えると、世界全体の人々のお尻に一度に火がつくような状況（他人事で済ませる人がいるうちはダメでしょう）の中でしか問題のほどきよう（産業バブルそのものの体質転換の合意＝持続可能社会への移行）がないように思われます。

産業バブルの中で既得権を握り巨大な影響力を駆使する国や組織が、その神通力を失うには相応の状況が必要のようです。それが気候温暖化のような地球環境問題の顕在化（例えば異常気象による世界的食糧不足）によるか、人為的な事故・事件（例えば同時多発的核施設破壊）、あるいは第三次となる世界大戦（戦争はいつの時代も“バブル”の究極・最悪の清算方法でした）によるか…。

どうやら紙面が尽きてしまいました。「止める手立てはあるのか」を含め、私がお伝えしたかった“渾身のメッセージ”は、別の機会を頂きます。

一昨日（8月3日）から、妻と娘は稲刈りにかかっています。私もこれから鎌を研いで、さあ、田んぼへ！

またポンと書いておきます

胸中には伝えたいことを山ほど抱えながら、それをどう表現したのかと思ひあぐねる内にメ切日に追い込まれ、机に向かったものの、ペンは動かず…。正直に告白すると、21世紀を無事に迎えることができたら小生の存在は皆さんの記憶から外して貰うことを胸に置いて参加したのが30周年でした。人生卒業(あの世行き)までに目処をつけたい課題を実践・記録するには肩の力を抜いて(時機至るまで娑婆付き合いを程ほどにサボって)生き直したかったです。ところが(Y2K問題も事無きを得、区切りの新世紀に入り)野良・山仕事、交流研修館整備(戦前の村役場建屋を貰い受け、人とモノと情報の出会いの場にしよう)などに精を出しかけていたら、NY9.11事件勃発。アフガンからイラクへと戦火は及び、落ち着かぬ日々を重ねる内(2度渡航しかけたのですが事情在って断念)…昨年暮れに足元の五和町に思わぬ風が吹いて町議会が解散され、選挙に。16名の定員が12名に削減された中で前職9名が公民権停止という異常事態。一群の人達から推されて断り切れずに立候補を決めたのが元旦。投票日2月1日、支出した費用は25万円程(過半はカンパ)ながら492票、5番目で当選。合併問題を抱え火中の栗を拾うような役目状況の地方自治最前線に(この2ヶ月余、心構えに反して、もう結ぶまいとしていたネクタイに、幾度気の進まぬ手を伸ばしたことか)。

告白一転、報酬(手取り18万円/月程)を得る身になりながら前回同様特別待遇に甘えて今回も参加するのは、風の吹き回しで皆さんの中にも“帰農”(晴耕雨読+才能の地域還元)を心掛ける人もおるやも知れず、多少なりともお役に立つならそれがお返しになろうかと…、借りを作った方が天草にも足が向き易くなるろうかと…。“農力”ある持続可能性社会への道のり、遙かと思えばこそ。勝手御免！